

演題名

がん遺伝子パネル検査における看護支援の実際

演者数

太田果苗 太田由美

【目的】

がん遺伝子パネル検査は、がん患者にとって新たな治療選択肢という希望になる一方で、期待する結果が得られない場合や二次的所見が判明した場合などで心理的な負担を与えることがある。今後の患者支援体制充実に向けて、当院における専門的知識を有する看護師介入の現状を調査した。

【方法】

2021年6月から2023年6月に当院でがん遺伝子パネル検査を受けた患者を対象とする後向き研究を行った。がん関連認定看護師およびがんゲノム医療コーディネーター資格を有する看護師による検査説明時および結果説明時の状況を解析した。

【結果】

対象者は58名。年齢の中央値は64歳（範囲31-80）。検査説明から結果説明までの所要日数の中央値は58日（範囲30-154）。結果説明時の患者の治療状況は治療継続中49名（84%）、緩和治療主体8名（14%）。結果説明前に1名死亡。国内承認薬の到達は3名、臨床試験の提示があった33名のうち4名は当該医療機関に紹介受診したが参加には至らなかった。生殖細胞由来の推定があった6名のうち3名が遺伝カウンセリング外来を受診。看護師介入は検査説明時41名（72%）、結果説明時33名（58%）。結果説明時の患者の反応や相談内容（重複あり）は、身体症状・生活面の悩み55%（18/33）、今後の治療に対する不安30%（10/33）、遺伝に関する不安18%（6/33）、治療の選択肢がないことへの落胆15%（5/33）、治療に関する発言15%（5/33）、代替療法の相談6%（2/33）であった。

【考察】

がん遺伝子パネル検査を受けた患者のうち約2か月後の結果判明までに治療終了に至る方もいることが分かった。結果説明時に生活や今後の治療に対する不安を訴える方がいる中で、看護師介入は全体の約6割であり、患者支援体制が十分とはいえない。今後は説明時に看護支援できる体制をより整備するとともに、患者が適切なタイミングに検査を受けられるよう治療医や関係スタッフと連携していくことが重要と思われる。